タイトル:『汐製菓会社の新作 87 ヌガー2』

キャスト

- **汐（30代）**：汐製菓会社の社長。発想が大胆で陽気な人物。「面白きことも無き世を面白く」が信条で、毎回奇抜な商品を打ち出す。
- **塩田（30代）**：汐の秘書。しっかり者で現実的な性格。甘党ゆえに製菓会社に就職したものの、汐の発想に振り回される日々を過ごしている。

シナリオ

シーン1：オープニング – 会議室

（会議室に社員が集まり、社長の発表を待っている。みんな緊張した様子でざわざわしている。）

汐：「さぁ、今日は汐製菓新作 87 号の発表だ！…みんな心の準備はいいか？」

社員 A：（小声で隣の社員に）「心の準備って…まるで戦地に送り出されるみたいな言い方ですね。」

社員 B：（クスクス笑いながら）「でも、社長の新作って毎回クセが強すぎて…確かに構えてしまうよね。」

塩田：（不安そうに一息ついてから、手帳を片手に汐を見上げる）「社長、今回のアイデアは…安全ですか？」

汐：「もちろんだとも！今回のテーマは“和洋折衷”だ！…その名も『ヌガー ミント・ほうじ茶味』！」

（社員たちは驚き、口をぽかんと開けている。ひそひそとざわめきが広がる。）

社員C：「ヌガーに…ミント？しかも、ほうじ茶って…？」

社員D：「今度は何を考えてるんだろう…完全に予想外だ…」

塩田：「社長…『和』と『洋』の混ぜ方が斬新すぎませんか？ヌガーとほうじ茶なんて、一般的には相容れない組み合わせかと…」

汐：「そんなことない！逆にそこがポイントだ。ミントの爽快さとほうじ茶の香ばしさが合わされば、新感覚の味になるに違いないんだよ。」

社員A：「でもそれ、本当に食べる人がいるんでしょうか？僕たちも味見しないと納得できません…」

塩田:「皆さん、落ち着きましょう。試作品を作ってから味見して判断しましょう！」

汐:「いいじゃないか、塩田！そうこなくっちゃ。さぁ、すぐに研究室に取り掛かろう！これから試作品の大挑戦だ！」

シーン2:研究室 – 試作に苦闘する社員たち

（研究室。社員たちがエプロン姿で材料を並べている。ミントとほうじ茶の試作を始めようとしているが、誰もが少し緊張した面持ちだ。）

社員A:「それで、ミントとほうじ茶の配合をどうするかって話だけど…社長、何か指示は？」

汐：「まずはドーンといこう！ミントエッセンスをたっぷり入れて、ほうじ茶のパウダーも惜しみなく投入だ！」

塩田：（止めようとしながら）「ちょ、ちょっと待ってください社長！分量のバランスが重要なんですから…もう少し慎重に…」

社員B：（恐る恐る）「うん、塩田さんの言う通り、ミントが強すぎると…こう、スースーしすぎてしまいますよね？」

汐：「大丈夫、思い切りの良さも大切だろう？ほら、こうやって…」（思いっきりミントエッセンスを投入する）

（エッセンスを入れた途端、泡が立ち、煙が上がり始める。慌てる社員たち。）

社員C：「煙が！…これ、もしかして失敗じゃないですか？」

汐:「いやいや、アクシデントも込みで挑戦だよ。ほら、もっとミントの香りを楽しんでくれ！」

塩田:（咳き込みながら）「社長、それって…ミントの香りが強すぎて鼻がツーンとするだけでは…」

社員A:「これで本当に商品化できるんでしょうか…次は、もう少し量を調整してみましょう。」

（みんなが手を尽くしながらも、試作はなかなかうまくいかない。何度かの試行錯誤を経て、ようやく形になる試作品が完成する。）

シーン3: 試食会 – 社員たちの反応

（会議室に戻り、ようやく完成した試作品が並ぶ。社員たちは自分たちで作ったものを恐る恐る試食し始める。）

社員A：（一口食べてみてから、驚きの表情）「こ、これは…不思議な味がする！」

社員B：「最初はミントキャンディーのような爽やかさがあるけど…後からほうじ茶の渋みが押し寄せてきて…」

社員C：「まさに異次元体験ですね。ミントで爽快になって、ほうじ茶で落ち着く…でも、舌が混乱してます。」

塩田：「これ、かなりクセになりますね。正直、最初はどうかと思いましたが…食べれば食べるほどクセになりそうな…」

汐：「だろう？ 忘れられない味、ってこういうことさ！ 汐製菓の新時代の幕開けだよ！」

社員D：「でも…本当に一般の人にも受け入れられるんでしょうか…？」

汐：「心配ご無用！我々の手で面白さを広めていくんだ。これが『汐製菓』の真髄だよ！」

（社員たちは半信半疑ながらも、汐の情熱に押されて、商品化に向けて準備を進めることに。）

シーン4：マーケティング戦略 – 宣伝会議

（塩田がマーケティング会議を開き、どう売り出すかを皆で相談している。）

塩田：「さて皆さん、この商品をどうやって伝えれば興味を引けるのか…アイデアを出し合いましょう！」

社員A：「えーと、どうでしょう…『未知の味わい』とか？」

社員B：「でも、それだと他の商品とも被りますよね。もっと独自性が出せるような…」

汐：「どうだろう、『お口の中が異次元へ！和洋折衷の新感覚』っていうのは？」

社員C：「それはちょっと強烈すぎますかね…むしろ『新しい和洋のコラボ』とか柔らかくアピールしては？」

塩田：「どうでしょう、ハッシュタグを作ってSNSに合わせたキャンペーンにするのもいいかと。例えば『#異次元ヌガー体験』『#新世代の和洋折衷』とか。」

汐：「いいね、それで行こう！SNSでバズるために、おしゃれなビジュアルも作るんだ！」

社員A：「それなら、試作品のパッケージもこだわりましょうか。イメージ的には…和モダン風とか？」

塩田：「それはいいですね。和の要素も取り入れつつ、モダンでスタイリッシュなデザインにしましょう！」

（社員たちは様々なアイデアを出し合い、最終的に「口の中で広がる日本と西洋の融合」というコンセプトでプロモーションを進めることになる。）

シーン 5：海外試食会 – 国際的な反響

（試食会場、ニューヨークの高級ホテルで行われる試食イベント。アメリカ人やフランス人のシェフが集まっている。）

アメリカ人試食者 A：「ヌガーのミントと…ほうじ茶？いったいどんな味がするんだ…」

アメリカ人試食者 B：（試食しながら驚き）「うわ、これは爽やかだけど渋い…日本のお茶

がこんなふうに使われるなんて想像もしてなかった！」

フランス人シェフ:「これはまさに食のアートだ。ほうじ茶の深みとミントの鮮烈さ、両方が絶妙に交わっている…」

イギリス人インフルエンサー:「おぉ…これぞ和洋折衷の真髄！斬新な味わいだわ！」

（会場は盛況で、SNS上でも「異次元の味覚体験」として話題になり始める。）

アメリカ人の食レポ:「この味は、まるで東洋と西洋が口の中で出会っているようだ。スモーキーでさわやか、クセになるよ！」

シーン6: クライマックス – 大成功と次なる挑戦

（試食会が成功し、「ミントほうじ茶ヌガー」が大ヒット。社員たちは達成感に満ちている。）

塩田：「社長、すごいですね。こんなに大ヒットするなんて…」

汐：「塩田、これが私たちの会社の魅力だよ。さぁ、次の新作に取りかかろう！」

塩田：「え…また新作ですか？」

汐：「もちろん！次は『カレースパイスヌガー』だ！」

社員たち：「えええっ！？」

（社員たちは驚きつつも期待の眼差しを向ける。場面が笑いに包まれ、「面白きことも無き世を面白く」とともに幕を下ろす。）

シーンごとの尺割り

シーン 1：オープニング – 会議室（約 10 分）

- **会議での発表**：新商品の発表と社員たちのリアクション、汐のキャラクター紹介を兼ねてたっぷりと。
- **会話量**：登場人物紹介と予想外の商品提案での盛り上がりを見せ、社員同士のひそひそ話も交えながらコミカルな掛け合い。

シーン 2：研究室 – 試作に苦闘する社員たち（約 15 分）

- **試作の困難**：何度も試作に挑戦する様子を細かく描写。汐の大胆すぎる投入と塩田の慎重さでテンポ良く笑いを作る。
- **会話量**：社員たちの不安や驚き、汐の発想に振り回される様子がメインで、やり取りを多めに入れることでボリュームを増やす。

シーン3：試食会 – 社員たちの反応（約10分）

- **試食会**：試作品の初試食シーン。驚きのリアクション、味の感想や予想外の体験を面白おかしく表現。
- **会話量**：個々の社員の驚きや戸惑い、汐の満足げな表情と、塩田の困惑したフォローなどを交えて臨場感を出す。

シーン4：マーケティング戦略 – 宣伝会議（約10分）

- **宣伝戦略会議**：ユニークな商品の売り方を考えるシーン。社員のアイデアを汐が次々とぶった切り、最終的にSNS戦略に。
- **会話量**：様々なアイデアの提案と却下、試行錯誤が続く会話中心のシーンで、テンポ良く次の展開につなげる。

シーン5：海外試食会 – 国際的な反響（約15分）

- **海外での反応**：国際的な視点で試食されるシーン。文化の違いによるリアクションやインフルエンサーの意見など、国際的な盛り上がりを描写。
- **会話量**：海外の人々の驚きのリアクションや風味への評価、異国のコメディ要素も盛り込みつつ、SNSやメディアで拡散する様子を描く。

シーン6：クライマックス – 大成功と次なる挑戦（約10分）

- **エンディング**：商品が大成功するシーンと、汐の次なる挑戦で作品を締めくくる。
- **会話量**：社員たちの喜びや驚き、汐の次のアイデアでさらに意表を突く終わり方でエンディングを盛り上げる。

合計：70分